



「Corridart」(コリダール)とは、corridor(回廊)とart(美術)の二つのフランス語を合わせた造語です。横須賀美術館地階の回廊型のギャラリーにちなんで名づけられました。

**【特集】**  
**開館10周年**  
**みんなが選んだ谷内六郎**  
**《週刊新潮 表紙絵》人気投票結果発表**  
**谷内六郎 その魅力と影響**  
 佐藤可士和

**【企画展のご案内】**  
**没後40年**  
**伊藤久三郎展**  
**—幻想と詩情—**

**第3期所蔵品展**  
**【特集】 岡本健彦**

**【この1点】**  
**伊藤久三郎《遮蔽》**

**【小特集】**  
**福祉講演会の歩み**

編集：横須賀美術館 / 平成29年10月発行  
 デザイン：藤田 雅臣 (tegusu Inc.)  
 印刷：朝日オフセット印刷株式会社  
 ※このニュースは10,000枚作成し、1枚あたりの印刷費は約33.4円です

横須賀美術館の情報は公式TwitterやFacebookでもご覧いただけます。

## 展覧会のご案内

### 開館10周年

## 没後40年 伊藤久三郎展 —幻想と詩情—

日本のシュールレアリスムを語るうえで欠かせない画家・伊藤久三郎。初期作品、戦後の抽象画を含めた油彩画約70点のほか素描等の資料をあわせて約150点で回顧します。

会 期	平成29年11月18日(土)～12月24日(日)
休 館 日	12月4日(月)
開館時間	10:00～18:00
観 覧 料	一般 800円、高大生・65歳以上600円、中学生以下無料



《合歡の木》1939年、京都市美術館蔵

### 第3期所蔵品展

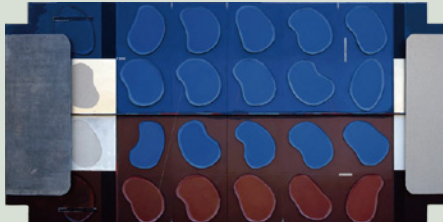
## 【特集】 岡本健彦

横須賀出身で、昨年9月28日に逝去した美術家・岡本健彦の作品を特集します。

1934年、横須賀市不入斗町に生まれた岡本健彦は、県立横須賀高校在学中から画家を志し、多摩美術大学卒業後の1963年から5年間、当時世界の美術の最先端であったニューヨークで学びました。以来、表現の手段をさまざまに変えながら、絵画を四角い平面という形式から解放し、再構築しようとする試みを続けました。

今回の特集では、変形させたアクリル板を組み合わせた《青図上の風景》(1985年)から、2000年代に手がけた《24の丸》(2002年)などの「丸」のシリーズまで、横須賀美術館で所蔵する岡本健彦作品11点をすべて展示いたします。

会 期	平成29年 10月7日(土)～12月17日(日)
休 館 日	11月6日(月)、12月4日(月)
開館時間	10:00～18:00
観 覧 料	一般310円、 高大生・65歳以上210円、 中学生以下無料



### この1点

## 伊藤久三郎《遮蔽》

1953年、当館蔵



よく知られています。

戦後は京都に戻り、行動美術協会を中心に、変化を恐れずにたえず新たな作風に挑戦しています。本作《遮蔽》は、シュールレアリスムとは異なり、1950年代半ばに伊藤久三郎が手がけていた抽象的傾向の作品の1点で、第8回行動美術展に出品しています。抽象といっても幾何学的で厳しいかたちで構成されているわけではありません。画面の重要要素である、多数ひかれた黄色い線は、決してまっすぐで単一ではなく、手で引いたことがみとれます。画面の左右、中央の茶色の色面が、黄色い線と小さな円と緊密に結びついています。

伊藤久三郎は、こうした「抽象的」モチーフをどこから得ていたのでしょうか。彼が残した多くのスケッチブックにそのヒントがあります。本作についての下絵ではありませんが、デッサンを追ってゆくと、何かを見た時、あるいは偶然に思いついたものを簡略に描きとめ、徐々に単純化し、モチーフにたどりついた形跡がみとれるのです。時にはなんらかの工芸作品や民俗資料の文様を抽出しています。

彼は1971年のインタビューで「夢の中でみた世界をヒントにしたり、偶然に思いついたアイデアを視覚化していく。」(京都新聞、1971年8月)と述べています。本作について直接言及したわけではありませんが、興味深い言葉だといえます。伊藤久三郎に限らず、無意識の世界である「夢」を絵画にする手法は、シュールリアリストの常套手段です。けれども、伊藤久三郎は画業の長きにわたって、「夢」を重要な着想源にしていました。抽象画といっても、具体的なきっかけをもとに制作していた伊藤久三郎の、絵画の背景にも着目したい1点です。(Kd.K)

横須賀美術館の所蔵品の中から、毎回1点を選んでご紹介する「この1点」です。



谷内六郎 その魅力と影響

佐藤可士和 (クリエイティブディレクター)

谷内六郎の絵が好きだ。昔からとても好きだ。なぜだろうといつも考える。見るたびにいつも少年の頃にあっていう間に連れて行ってくれるからか。温かいのにヒヤリとする、楽しいのに切ない、懐かしいのに普遍的。不安や希望が入り混じり、楽しさと恐怖が一掃になり、胸がザワザワするのにホッとする。壊れてしまいそうな深い思い出がいつまでも続いてほしいと切に願う。こんな不可思議な思いを抱かせる独特の世界観が大好きだ。

どの世代までが谷内六郎の絵を見て懐かしいと感じるのだろうか？昭和40年東京生まれの僕の育った環境は、絵の世界よりも少し都会的だったにもかかわらず、それらの絵が僕にとって日本の、昭和の原風景なのだ。子どもながらに懐かしい、忘れてはいけない心の片隅にある情景だと感じていた。本来、原風景とは個人によって違うシーンであるのだが、昭和生まれの多くの人々とは、谷内六郎の世界に対する思いを共有することができるのではないだろうか。しかし21世紀になってから生まれてきた子どもたちはどうなのだろうか？生まれた時からスマホがあり、クルマも自動で運転されるような世の中だ。少しでもいいからあの日本の原風景に共感してほしいと、ついソスタルジックに思ってしまう。

僕はクリエイティブディレクターとして、さまざまな企業や商品のブランドを構築する仕事をしている。ブランディングには色々な側面があるが、「世界観」をつくるのが重要な役割の一つだ。日夜その世界観を好きになってもらえるよう、デザインやクリエイティブの力を用いて奮闘している立場から見ると、谷内六郎の世界は、明確でありながら非常に複雑な、見ている者が引き込まれてしまう世界を構築できていて本当に素晴らしいと思う。

谷内六郎の世界に影響を受けた僕の仕事に、ホンダの「ステップワゴン」というミニバンの広告キャンペーンがある。僕自身が描いたイラストレーションに「こどもといっしょにどこいこう。」のキャッチコピーを添え、絵本の中に飛び込んだような世界観を展開したキャンペーンだ。新発売時の新聞広告やポスターでは、小学生の男の子がクルマの横で浮き輪を抱え、今か今かと家族旅行に出発するのを待ちきれないワンシーンを、写真の切り抜きとクレヨンで描いた文字のみで表現した。

それは僕が子どもの頃、実際に毎年経験していた幸せな体験だった。夏休みに母の故郷、静岡の相良町という海辺の小さな町の親戚の家に泊まりに行き、毎日海で従兄弟のお兄さんたちと遊ぶことを何よりも楽しみにしていた。どこまでも広い海、白い砂浜、真っ青な空に入道雲、大音量の蝉の声、波乗りをしたり、砂でお団子を作ってぶつけあったり、海から上がって冷えた体でおでんを食べたり、スイカ割りにドキドキし、くらげやカニをとったり、海だけでなく、山や川で思い切り遊ぶ夏休みがいつまでも続けばいいのにと、夏が終わる東京に帰らなくてはいけない頃にはいつも寂しく切ない気持ちになっていた。子どもと一緒に家族で遊びに出かける、そんな幸せの原風景をブランドの世界観にすることをコンセプトとした表現だった。その後、続くシリーズでは、クルマが海中の魚と泳いだり、くじらに飲み込まれたり、恐竜や宇宙人と遊んだり、現実には不可能な、夢の冒険に行くようなアイデアで40作以上を展開した。1996年から約8年間続いたこのキャンペーンは多くの人々から共感を獲得、ステップワゴンはミニバンのNo.1ブランドとなっていた。

僕の体験した幸せな記憶を表現として定着させることができたのも、谷内六郎の世界に触れていたからだろうと思う。もちろん絵のテイストや題材などは全く違うものだが、「心の中の大切な原風景」を見ている人に感じてもらいたいという思いを込めて制作した。楽しくも大切な、幻想的だがリアリティも感じる。谷内六郎の抒情詩的な世界に触れていたことで、自分の体験をベースに新しい表現が生まれた。谷内六郎の絵から学ぶべきこと、忘れてはいけないことは、まだまだたくさんありそうだ。

佐藤可士和(さとう・かしわ)

1965年東京生まれ。クリエイティブスタジオ「SAMURAI」代表。主な仕事に国立新美術館のシンボルマークデザイン、ユニクロ、楽天グループ、セブン-イレブンジャパン、今治タオルのブランドクリエイティブディレクション、カップヌードルミュージアムのトータルプロデュースなど。毎日デザイン賞ほか多数受賞。慶應義塾大学特別招聘教授、多摩美術大学客員教授。http://kashiwasato.com/



開館10周年

谷内六郎《週刊新潮 表紙絵》展 みんなが選んだ谷内六郎

2017年 10月7日(土) - 12月17日(日)

開館時間 10時~18時  
休館日 11月6日(月)、12月4日(月)  
会場 横須賀美術館 谷内六郎館  
観覧料 一般310円、高大人・65歳以上210円、中学生以下無料

※()内は20名以上の団体料金  
※企画展のチケットで、所蔵品展・谷内六郎館は無料でご覧いただけます。  
※高校生(市内在住・在学に限る)は無料  
※身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方と付添1名様は無料

週刊新潮 表紙絵

人気投票 結果発表

『週刊新潮』の表紙絵で広く知られる谷内六郎(1921-1981)。約1,300点にのぼる表紙絵原画のほぼ全てが美術館に収蔵されています。このたび、開館10周年企画として、厳選された123点の原画を対象とした人気投票を行いました。2016年(平成28年)7月9日(土)~2017年(平成29年)4月9日(日)までの255日間(休館日、展示替え期間中を除く)、谷内六郎館で行なった投票には、3,370人の方が参加されました。投票してくださった皆さま、ありがとうございました!

人気投票は『谷内六郎コレクション120』に掲載された123点が対象となりました。



撮影:平川嗣朗

谷内六郎コレクション 発売中!

ミュージアムショップでは、本特集で紹介した作品が掲載された『谷内六郎コレクション120』がお求めになります(税込1230円)。その他の谷内六郎関連書籍も取り扱い中です。



6位 タネを吹く子

1960(昭和35)年5月23日号  
懐かしく、子どものころやったなーと思えます。優しい感じが好きです。(61-80歳、女性)

開館10周年 みんなが選んだ

谷内六郎

たにうちろくろう



3位 夜の公衆電話



大好きな祖父の家に谷内さんの画集があって、いつも子供の頃見ました。この絵はとても印象に残っていて夕暮れ時、路地を見つめてはキツネがないか探していました。(21-40歳、女性)

子どもの頃って、狐がたしかに夜の世界にはいました。そのことを忘れないでいさせてくれます。(41-60歳、男性)

1位 金魚はユカタで夏まつり

1979(昭和54)年6月21日号



子どものころ週刊新潮が家にあり、思い出しました。子どもの頃の考えていた風景はこんなだったなーと思えました。(41-60歳、女性)

金魚のイメージが、ゆかたを着た子どもとピッタリだと思います。色もかわいらしくて好きです。(21-40歳、女性)

私も、女の子の赤い帯は金魚の尾ひれのようなだと思えました。(61-80歳、女性)

2位 ラッシュアワー

1978(昭和53)年7月20日号



子どもの頃、毎日のように、アリの様子をずっと見ていたことを思い出しました。絵と自分が重なりました。(41-60歳、女性)

たくさんのアリに思わず声「うわあ!」と出ました。子どもの頃、しょっちゅうこんなことしていたなあ。(41-60歳、女性)

4位 あぶくのファンタジー

1961(昭和36)年7月31日号



夏らしく、可愛らしく、淡くて、夏のイメージにぴったり。(21-40歳、女性)

明るい色合い、子どもの表情、そしてファンタステックな雰囲気、それが好きです。(41-60歳、女性)

5位 遠足

1962(昭和37)年4月30日号



昔の遠足の時、まったくこのとおりでした。(61-80歳、女性)

牧歌的、ほのぼのとした子どものころ。(41-60歳、男性)



7位 パーマ屋さん

1969(昭和44)年4月19日号  
洗濯ばさみを使ってパーマをかけているところが面白い。左に順番待ちがいて面白い。(15歳以下、女性)



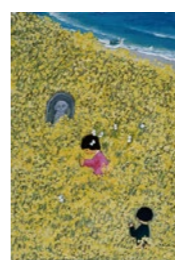
7位 火星人だ

1971(昭和46)年9月25日号  
かわいらしいはずら?に胸キュンです。(21-40歳、女性)



7位 迷った町の知らない子

1971(昭和46)年11月13日号  
夕暮れの心細さが伝わってきます。(年齢・性別不詳)



7位 リボンについてくる蝶

1974(昭和49)年4月4日号  
父が谷内六郎さんの絵が好きで表紙をとっていました。そのうちで記憶に残っているものです。(41-60歳、女性)



# 横須賀美術館 福祉講演会の歩み

“見ればわかる”を当たり前にしない

横須賀美術館では2005年から、「視覚障害者の美術鑑賞」をテーマとした福祉講演会を年1回開催してきました。この講演会では、ヨーロッパでつくられた「触察本」の先進事例や触覚による鑑賞活

動を中心に紹介することで、美術作品を見る（＝理解する）とはどういうことかという考えを深めてきました。さまざまな事例を紹介してきたこれまでの歩みを4つのカテゴリーに分けてふり返ります。

※触察本とは、エンボスや樹脂加工によって凹凸をつくり、手で触ることによって、美術作品について理解したり鑑賞できるようにつくられた本のことです。  
※講演会はNPO視覚障害者芸術活動推進委員会とギャラリーTOMの協力により開催しています(2005年を除く)。  
※講師の肩書きは実施当時のものです。

## 1 すぐれた研究者の理念、実践

2006年、2015年

講師：ホエール・コルヴェスト

パリ科学産業博物館 視覚障害者アクセス部門主任

タイトル | 手で見る美術 一視覚障害者の美術鑑賞  
ピカソの絵を手がかりに(2006年)

タイトル | ミュージアムをもっと身近に  
一視覚障害者の立場から(2015年)

触察本「手で見るピカソ」や、建築物を理解するための「建築の鍵」の企画制作に携わったコルヴェスト氏。美術史の研究者、障害当事者としての立場から、視覚障害者の美術鑑賞や空間認知の方法についてお話してくださいました。2015年には再招聘し、パリ科学産業博物館での約30年にわたる活動のふり返りも。

ベッシニョール氏は版画家として、コルヴェスト氏の触察本づくりを制作面から支えました

2013年

講師：クリスチャン・ベッシニョール

エティエンヌ産業・芸術グラフィック高等学院名誉教授

タイトル | まったく同じものでもない、まったく別のものでもない！  
一触察本の制作現場から



左：ベッシニョール氏が制作した触図のための原版。作品のどの要素を重視するかなど、作品の解釈がとて重要だという。右：触図の試作をコルヴェスト氏が触り、改善するという作業の繰り返しによって、いくつもの優れた触察本が生まれた。

2007年

講師：ファビオ・レヴィ

トリノ大学コミュニケーション学科教授

タイトル | さわって、みる 一触覚からの接近

視覚障害者の触察について考える研究グループ「タクタイル・ヴィジョン」の一人。レヴィ氏は、視覚障害者だけでなく、晴眼者など多くの人にとって有益な方法を探求していました。



触察本「第二の視線によるバルテリのフリーズ」のページ。人や馬などの重なりを丁寧に図解している。それぞれの図や写真に凹凸がつけられているので、見ても触っても分かりやすい。

2016年

講師：シルヴィオ・ザモラーニ

シルヴィオ・ザモラーニ出版

タイトル | 指先で読む本を広めたい！  
一触察本の出版現場から

レヴィ氏と共同し、ザモラーニ出版は美術や自然科学など、多岐にわたる分野の触察本を出版しています。

## 2 「さわれる美術館」という試み

2008年

講師：アルド・グラッシーニ

イタリア国立オモロ触覚美術館研究員

タイトル | さわれる美術のはなし

学校の廊下を使った私設ギャラリーからはじまり、世界でも稀な国立の「さわれる美術館」となったオモロ触覚美術館。美術館設立の経緯を中心とした、社会における美術館の役割、展望に関するお話でした。

オモロ触覚美術館の創始者の一人でもあるグラッシーニ氏。トラサッティ氏は、グラッシーニ氏の理念を受け、触覚を活かした多様な教育普及活動を実施しています。

2014年

講師：アナリザ・トラサッティ

イタリア国立オモロ触覚美術館学芸員

タイトル | 美術館はみんなのもの！  
一オモロ触覚美術館の普及活動から



美術館は晴眼者だけのものでもなく、視覚障害者も含めて、万人のためのものという強い理念をもつオモロ触覚美術館。障害の有無や年齢を問わず、多くの人が集う。

## 3 その他の美術館の取組み

2009年

講師：シリル・グリエット

ルーブル美術館視覚障害者美術教育主任

タイトル | もうひとつの鑑賞法 手でみる美術  
ルーブル美術館の実践活動から



左：彫刻のレプリカに触って鑑賞することができる「タクタイルギャラリー」。時代順ではなく、「跳躍」などのテーマ毎に展示されている。右：タクタイルギャラリーの展示テーマと連動した触察本もある。

2010年

講師：アニタ・デル・ヴィット

ボンビドゥーセンター視覚障害者教育担当

タイトル | 手で見る絵画 一パリ・ボンビドゥーセンターの実践



左：企業と連携して触察プレートをつくり、館内に常時設置しているボンビドゥーセンター。右：触察プレートの一部分。プレートにはいくつかの深さの層があり、モチーフの重要度などによって凹凸の深さが決められている。

2012年

講師：デルフィーヌ・アルメル

元ケ・ブランリー美術館 障害者来館促進担当

タイトル | さわれる美術館のつくりかた 一誰でもアートが楽しめる！



左：ケ・ブランリー美術館には視覚障害者のための設計が数多く存在する。一例として、行き先を明確にするためにセクション同士をつなぐ道がある。右：道の壁にも触察ポイントが設けられている。

## 4 日本人アーティストの取組み

2005年

講師：光島貴之

造形作家

タイトル | 指／言葉でつむぐアート  
一視覚障害者と美術

視覚に障害のある光島氏が創作活動を行うようになった経緯や、制作方法に関するお話。また、後半には視覚障害者と晴眼者の美術鑑賞ツアーの紹介や触図を鑑賞する体験も。



2011年

講師：駒形克己

造本作家／デザイナー

タイトル | TACTILE＝触覚

日仏で共同出版された視覚障害者のための本や、国内外で開催している触覚を活かしたワークショップのお話。



### Information

これまでの福祉講演会をふり返る「指先から広がる可能性 一触覚による美術鑑賞」を2018年2月10日(土)14時より開催いたします。詳しくは美術館ホームページのイベント欄をご覧ください。